

1 学校の状況と地域の実態

- (1) 授業研究を中心とした教員の研究・研修は定着してきている。子どもの学び合いを通じた、思考力・表現力等の資質能力の育成という目標を実現するために、子ども主体の学習が展開できる指導のあり方をさらに追究していく。
- (2) 経験の浅い職員の教師力向上を図るため、メンター研を中心に主体的に研究・研修に取り組む場の設定や教職員が相互に連携・協働する学校組織の活性化を図る。
- (3) 特別な教育的支援が必要な子どもへの対応がますます求められている状況がある。通級指導教室や個別級との連携を一層深め、関係機関とも連携して取り組む必要がある。
- (4) 学力に比べ、学習意識、生活意識に課題が見られる学年がある。自尊感情、自己有用感の育成を図ると共に、体験的な学習の充実を通して、学習意識、生活意識の啓発を行う必要がある。
- (5) 地域人材の活用やボランティアを活用した学習を積極的に取り入れ、学校運営協議会にも理解を得ながら学校・家庭・地域との連携による学習を推進していく。

2 今後3年間の方向（中期学校経営方針）

学力向上に関する指導の目標・方針

- 人とかかわりを大切にし、共に高め合うことに重点をおいた教育活動を進め、「自分大好き」「みんな大好き」「ひとみかがやく西が岡の子」を育てます。
- 子ども主体の授業への改善に努め、思考力・表現力等、資質能力の育成に努めます。また、校内の特別支援体制を整備し、子ども一人ひとりにあったいい指導を行います。
- 体験的な学習や問題解決的な学習を充実するとともに、地域の教育力を積極的に導入することで自尊感情や自己有用感の育成を図ります。

3 全国・横浜市学力学習状況調査等からの令和3年度の実態把握

学習への関心は高まっているが、平均よりやや低い。その中でも、総合学習への関心は他教科に比べ、低い傾向が見られる。また、生活においては規範意識や自尊感情の醸成に課題が見られる。学習意識、生活意識のバランス良い向上が必要である。

今後は、より意欲的に学習に取り組めるよう、魅力ある体験的・問題解決的な学習の推進を行い、子ども同士が学び合う中で、知識・技能の確実な習得、思考力・表現力の資質向上に取り組むことが大切である。また、様々な人との関わりを多くもち、自己有用感や自己肯定感、規範意識を高めていくことで、自分や自分に関わる人を大切にすることができる子どもを育てていくことも求められている。

教科学習の状況

- 国語科：基礎的な言語能力は市の平均を上回る。表現力の向上に力を入れていく。
- 算数科：高学年に比べ、低学年の学力に課題が見られる。体験的に学習意識の向上を図る必要がある。
- 社会科：知識理解面では、市の平均を上回るが、社会的な思考力・判断力に課題が見られる。
- 理科：知識・理解は、どの学年も大きく市の平均を上回る。実験・観察力に取り組む必要がある。

経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

全体的に学力は横浜市の平均を上回っているが、上位層と下位層に分かれる二極化の傾向が年々強まりつつある。低学年の下位層児童の学力向上を図るためにも、個に応じた指導の充実を図る必要がある。また、学習意識、生活意識に課題の見られる学年がある。体験的・問題解決的な学習、子ども主体の授業が展開できるよう、指導の工夫を図る必要がある。子どもの学習の評価のあり方についても研究し、達成感や自己有用感の育成を図る取組を行っていく。

4 令和3年度 目標と具体的方策

令和3年度 目標

人とかわりながら多様な見方や考え方をすることで、自分を豊かに表現する子の育成

(1) 学校組織としての共通の取組み

- 体験的・問題解決的学習の充実と資質・能力の育成
主体的に学習に取り組めるように、授業の中で話し合いや学び合いの場面を効果的に設定したり、思考・判断した内容を、表現できる能力の育成を図る。すべての教科・領域で身に付ける資質・能力を明確にして、学びの目標と評価のあり方を研究していく。

(2) 学年・教科等としての取組

1 学年

- 望ましい学習習慣を身に付けると共に、「読む」「書く」「計算する」などの基礎・基本を身に付けられるようにする。
- 児童が学習の楽しさに気付き、自分の思いや願いをもって主体的に学習に取り組む、表現できるような授業場面の設定を工夫する。

2 学年

- 体験したことや気付いたことを、言葉だけでなく絵や図を使うなどして、自分らしく伝え合う場面を設定し、友達との学び合う楽しさを味わえるようにする。
- 体験的な学習活動を設定し、実感したことを自分の生活に活かせるようにする。

3 学年

- 自分の生活に生かす力を育むために、生活との関連を常に意識し、社会と関わる学習場面を設定していく。また、対話の場面を位置付けることで表現力の育成を図る。
- 既習事項を積み重ね、考えを深めたり自分の考えを説明したりする活動を取り入れていく。

4 学年

- 自分の考えをもち、伝え合う活動を通して、自らの考えをより広げたり、深めたりする。
- 校外活動やインタビュー、実験・観察などの見たり聞いたりする実感を伴う活動を多く設定し、学びの深化を図る。

5 学年

- 学習問題を自分の問題としてとらえられるように導入を工夫したり、話し合いの場面を設定したりする。
- 話し合いでは、まず友だちの考えを受け止め、自分の考えを整理できるようにする。また、活動の振り返りを行うことで自らの成長に気付くようにする。

6 学年

- 出会う事象や課題、問題を実生活や実社会と結び付けて考えられる場面を設定するなどし、主体的に学習に取り組めるようにする。
- ふり返りや話し合いの場面を効果的に設定し、対話（自己内対話・他者との対話）を通して、自分の考えの変容や深まりに気付くようにする。

個別支援学級

- 個別の教育支援計画・個別の指導計画に基づき、発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を体験できる場面を設けるようにする。
- 成長に合わせた小集団で行うさまざまな活動を通して、人との関わりの中から多様な見方や考え方に気付き、表現できるようにする。